文章の始まりが見えないときは下に少しスクロールしてください。

↓

旧東海道の難所、品濃坂～谷宿坂～焼餅坂

品濃口から坂下までは平坦な道であるが、そこから先、境木に至るまでは坂また坂のアップダウン烈しい道である。

まず旧品濃坂、坂下から坂上まで距離的には僅かであるが名にせおう急坂で両側に木が生い茂り昼なお暗く夏でも寒気のするような寂しい坂道であった。

道幅は１間少々で一応砂利敷きであったがなにしろ急坂ゆえ砂利をい

くら敷いても流れてしまい泥道といった方が的を得た表現である。

また雨が降ると窪んだ中央部分を水が流れ片側の僅かな端をツルツルと足を滑らせながら登り降りしたものであった。

この品濃坂は、後述する谷宿坂・焼餅坂より急峻で昔の旅人にとっては江戸・戸塚大坂間最大の難所であったといわれている。

しかし、平成10年環状２号線の完成により坂は分断され現在は歩道橋で環状２号線を渡って坂上に至っている。

歩道橋を渡ったところに「品濃坂」という碑が建っていて、ここが、かっての「品濃坂」であったことを物語り橋の下にできたバス停「品濃坂」にもその名を残している。

なお、土地の人は、この坂を「日向坂」とか「大坂」といいあるいは訛って「しなん坂」とも呼んでいる。

往時の坂道部分を除いた坂下から一里山に至る道端には道中の旅人を相手にした小商人の店が何軒かあったという。それぞれに屋号があり、その家の子孫はいまだに屋号で呼ばれている（もちろん、いまここに住んで無い家もあるが）。

因みにどんな屋号の家があったかというと坂下から順に「したのとうふや」「そうめんや」「ますや」「こまものや」「うえのとうふや」「ちょうちんや」「おけや」「かんてんや」「かじや」「いもや」「あたらしや」「しんみせ」「らおや」「したもちや」「うえもちや」などである。屋号からおおよそどんな商い家であったかの想像がつくが、ひとつだけ説明がないとわからないのが「らおや」である。

「らお」とはキセルのことで昔といってもついこの間まで使われていたきざみタバコを吸う喫煙具のこと。

想像であるが昔のタバコ吸いがヤニで詰まったキセルの掃除を頼んだ店ではなかろうか。いまキセルでタバコを吸っている人は見かけないが時代劇などでヤクザの親分や料亭のおかみが長火鉢の前でスパスパやっている場面を見ることがある。

次に谷宿坂に向かうのであるが途中素通りできない歴史遺跡「一里塚」がある。

「一里塚」とは、江戸時代、主要な街道に設けられた道程建造物である。

東海道でいえば江戸から京・大阪まで、一里（約４キロメートル）毎に塚を設け旅人に便宜を供したもので街道の両側に土盛りをし道程を知

らせると同時に塚に榎や松などの木を植え一息入れる場所として機能した。いわばオアシス的なものであった。

品濃の一里塚は保土ケ谷の帷子町と吉田元町の中間にあり江戸日本橋から数えて９番目の一里塚である。９番目ということは４×９で36キロメートルの地点である。

戸塚区内の一里塚は、ここ品濃と吉田元町・原宿の三か所あったが品濃の一里塚は当時の原型を残している唯一貴重な一里塚でもある。吉田と原宿には碑が建っているだけで、その風景を伺い知ること不可である。

平戸側の塚は明らかに土盛りをしたと思われる饅頭型でいま裏側は「一里塚公園」となっている。

一方、品濃側の塚も「品濃一里塚公園」となっていて平戸の公園より面積で２倍強もあるが、ここは一見すると自然林をそのまま塚にしたかの感じである。

余話であるが「品濃の歴史スポット解説」から引用すると「かって荒廃したこの塚の山上付近に子母美薬師堂があり堂前の街道を通る馬が決まって暴れるので里人は下馬薬師と呼びこれを不憫に思いある時、堂を街道から外れた東福寺境内に移した（約240年前）との史述がある。以

一里塚公園（品濃町）　旅人のパフォーマンスをしているのはミスターKの次女・智恵子

来この谷宿坂のことを子母美坂と呼ぶこともある。(現在この堂は修復されて東福寺境内にあり中に祀ってあった薬師や十二神像は東福寺本堂内にある）という話がある。

品濃一里塚辺りからマンション「フォレストヴァレー東戸塚」辺りまでの坂を「谷宿坂」（別名、子母美坂、古着坂ともいう）という。

名称の谷宿坂とは、この辺りの字名谷宿からきている。

また子母美坂という別名は前述したように子母美薬師の由来からで、もう一つの古着坂とは、この坂の途中にある「古着や」という屋号の家からきている。

谷宿という地名について記録に残っていないが、その昔宿屋らしき苫屋があったのかもしれない。なにしろ保土ヶ谷宿から戸塚宿間は２里半（10キロメートル）くらいあるので健脚の人なら、いざ知らず、足腰の弱い人や途中具合が悪くなった旅人には難儀であったに違いない。

また権太坂から品濃坂間は地形的自然的にも難儀であったが追剥や山賊などに襲われるという人的難義もあったであろう。

そんな気の毒な人に例え軒先でも貸す奇特な民家もあったと想像に難くない。

なお、この谷宿辺りを源流として平戸永谷川に流れ込む小さな川を地元では谷宿川と呼んでいる。

この谷宿の底から境木に至る坂を「焼餅坂」といい別名「牡丹坂」とも呼んでいる。

坂名の由来は、その昔この坂の峠に焼餅や牡丹餅を商う茶屋があったとか、あるいは、「焼餅の坂をこえてもいやらしい。品の坂なるばばがやきもち」（甲申旅日記）という説もある。

いまでこそ、この道沿いは開発されマンションや戸建住宅が建ち並んでいるが、その昔昭和40年代ごろまで沿道にチラホラ農家があっただけでなんとも鄙びた山里であった。

特に、焼餅坂は沿道両側に雑木林がせまり昼なお暗い寂しい坂道であった。

この焼餅坂を保土ケ谷方面へ上りきったところが武蔵･相模の国境で、「境木」という。

「境木」には、歴史的にも有名な「境木地蔵尊」がある。

この境木地蔵尊について俳人萩原井泉水が「帷子の里」と題して伝説

を残している。(戸塚の散歩みちより)

…はじめ、この地蔵尊は海中から鎌倉の由比ヶ浜にゆりあげられた。大きな姿なので、浜に祀っておくと、ある年の大水にまた海中に没した。その後数十年して再び出現したのは腰越の浜であった。その時、ある漁師の夢に、地蔵尊が現れて「わたしは江戸へ行きたいから皆の衆に運んでもらいたい。もし途中で動かなくなったらば、そこへ置いてくれればいい。」と言われた。同時に同じ夢をみた者が大勢あったので、牛車を仕立て、東海道をひいて、この境木峠まではきたが、ここで車が動かなくなったので、お託宣のとおりにした。石の地蔵を置き去りにされた境木の村人は、不気味に思っていたところ夢をみた。「どんな粗末な堂でもいいから、雨露をしのぐものを作ってくれ、その礼として、この地を繁昌せしめてやる」と。夢をみた者も二人や三人ではなかった。それから、ここに堂ができ、参詣の人が増すにつれて、茶屋小屋も軒を並べるようになったというものである。

いまでも、六月から八月の間の七の日には縁日が開かれ、毎回露店が

境木の投込塚(境木町)　見物をしているのは、ミスターKの次女・智恵子

ならび大変な賑わいをみせている。

ミスターK、その昔（昭和30年代ごろ）保土ケ谷方面への野菜の引き売りの手伝いで母のリヤカーの後押しをしながらこの地蔵尊の前をよく通った。そのころは付近に殆んど人家がなく本当に寂しい場所で夕方になると追剥がでるからと大急ぎで突っ切ったものである。

また、その先の権太坂も寂しい坂道で途中（いまの光陵高校の辺り）には、「投込穴」があった。

その昔、この道を往来し行き倒れになった旅人や疲れて動かなくなった牛馬を葬った穴といわれている。近くの道端に「投込塚之跡」の碑が建てられている。

ここを通る時も、背中に冷や汗をかいたものである。